彷徨（さまよ）い

―自分探しの旅に出かけて―

長田康秀（おさだやすひで）

彷徨（さまよ）い

―自分探しの旅に出かけて―

長田康秀（おさだやすひで）

はじめに

「夢」という素敵な言葉がありますが、人間だれしも少年時代は夢を持っていたと思います。その夢を大きく分けると、実現できた人、できなかった人の、二つに分かれるのではないでしょうか。私はその後者であり、少年時代の夢を実現できずに挫折しました。

今回のこの冊子は、私が夢を実現できずに何もかもに気力を失いかけ、情けない私自身を立ち直らせてくれたことや海外留学、海外生活のことについて述べたものです。

皆さんも、私と同じように夢を実現できずに終わらせた方がいたとしたら、また新しい夢を見つけ、たとえその夢がどんなに小さくても実現できれば、私は素晴らしいと思います。

お互い「夢」を実現させるために、前を向いて歩いて行きましょう。

Ｇｏｏｄ　Ｌｕｃｋ

長田康秀（おさだやすひで）

高校時代

私は中学生まで鹿児島に住み、高校は宮崎の私立日章学園に野球の特待生という形で入学しました。日章学園を選んだ理由は、そこがスポーツに大変力を入れている高校で、全国各地から優秀な選手を集め全国で十分通用するスポーツの学校を作りたいという目的を持っていて、そこに将来性を感じられたからです。

二つ目の理由は寮生活でした。

寮生活には洗濯、食事の準備、皿洗い、トイレの掃除など挙げればきりがないほど様々な仕事がありますが、一番重要な礼儀作法や人間形成をしてくれる場でもあるのです。そのような理由で、私は日章学園を選んだのです。

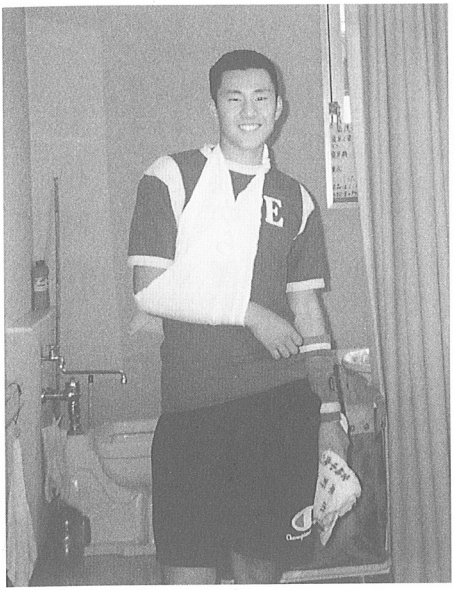
私は入学と同時にショートを守り、練習に明け暮れる毎日でした。中学生の頃はピッチャーでしたので、ショートというポジションには多少不安がありました。なぜならピッチャーとショートのスローイングは大変異なるからです。

案の定、私は肩を傷めました。それは野球選手にとっては致命傷とも言える「野球肩」と言われるものでした。

鹿児島、宮崎の整形外科や整骨院を何軒か回り診察を受けましたが、原因不明でした。結局は神奈川県の昭和大学藤ケ丘病院という、整形外科で有名な所で診察を受け

た結果、手術が必要という最悪の結末になりました。そこで私は両親、監督に何度か「手術をさせて欲しい」と申し入れましたが、その時はできれば手術はさせたくないというのがみんなの答えでした。

それは私の将来のことを考えてだと思いましたが、私は「肩の痛みは本人が一番知っているのに、なぜ手術に賛成してくれないのか」と思っていました。最終的に私自身が出した答えは高校中退か、他の高校への編入でした。なぜなら私は野球の特待生として日章学園に入学したにもかかわらず、その野球で結果を出すことができなければ、在学していても日章学園側に失礼だと思ったからです。



入院生活（高校時代）

両親と監督を含めた四人で話し合いをすることになり、私は話し合いの場で監督に率直に高校中退か、他校への編入を申し入れました。監督はそれを受け入れず、以前は反対していた肩の手術を勧めてきました。最終的に私の父が「たとえレギュラーになれなくても、甲子園に行けなくても構わない。レギュラーの人間

は部活を三年間継続するのは当たり前だ。しかし、補欠が部活を三年間続けるのはレギュラーよりはるかに根性や忍耐力が必要とされると思う。肩を手術して立派な補欠になれ」と私を励ましてくれました。その一言に涙が溢れ、私は気持ちがいっぺんに変わり肩の手術を決心しました。今考えてみれば、父のあの時の言葉の意味がよく分かります。

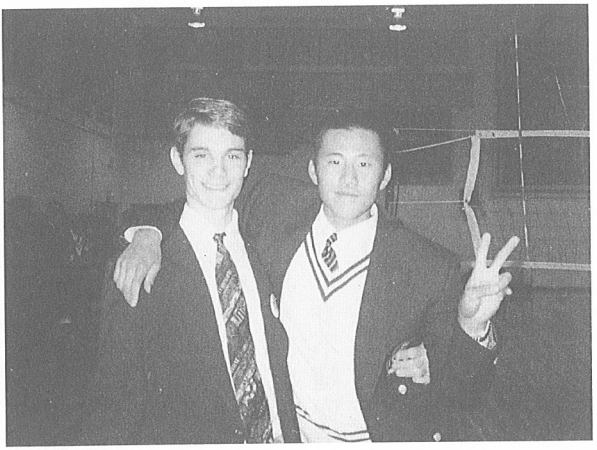
高校二年になる前の春、肩の手術をしリハビリのため入院しました。入院生活の中で大勢の患者さんに出会いました。患者さんの中には十年以上も入退院を繰り返されている方や事故で下半身不随の方など、様々な方がいました。でも一人ひとりが明るく楽しい方々ばかりで、リハビリを一生懸命頑張り社会復帰を目指していました。

その方々は、私に勇気や元気を与えてくれました。私は高校中退とか他校への編入などを考えていた自分自身に腹が立ち、情けない気持ちになりました。私にとって、この入院生活は貴重な体験となり、勉強をさせてもらいました。

退院して高校二年の十一月に修学旅行があり、私は両親を説得してアメリカに行かせてもらいました。アメリカのロサンゼルス、サンフランシスコを中心に観光し、姉妹校であるサンディエゴの高校を訪問、授業風景などを見学しました。アメリカの授業を見学した時に、日本の授業風景とは異なる点がいくつかあるのに気づきました。まず彼らは、先生が質問したことに対して答えが間違っていようが正解であろうが、恥ずかしがらずに積極的に手を上げ授業に参加しています。そして授業自体をクラス

のみんなで楽しんで盛り上げていることでした。

私は彼らの授業に対する姿勢を見習い、英語が話せようが話せまいが帰り際に必ず、だれでもいいから積極的に英語で話しかけてみようと思いそうしました。私は当時、マライア・キャリーという女性の大ファンであり、アメリカ人の男子生徒に「ライク・マライア・キャリー」と手振り身振りを交えながら気持ちで伝え、相手に何とか理解してもらいました。今考えてみれば「ドゥ・ユー・ライク・マライア・キャリー?」という言葉が適切なのでしょうが、当時の私は英語の文法なんかより髪、肌の色、または文化や生活様式がまったく異なる外国人に勇気を持って話しかけることが大切だったのです。そしてお互い理解し合えたことには感動しました。



アメリカへの修学旅行

その修学旅行以来、私は英語と外国に興味を持ち、幼い頃からの夢であったプロ野球選手になり、いつの日かアメリカの大リーグでプレーできるような選手になりたいと思うようになりました。しかし、現実と夢とのギャップは大き

く、問題の肩の故障も日常生活には支障はなかったのですが、野球を続けるうえでは限界でした。

結局私の幼い頃からの夢であったプロ野球選手になることは夢で終わり、自分自身に挫折し、何に対しても気力を失いました。

アメリカ留学

高校卒業後、鹿児島に新しく開校した鹿児島国際観光短期大学校に入学しましたが、私は心の片隅で野球という二文字を消すことができませんでした。

気持ちを切り替えて前向きにならなければと思っていても、なかなかできず時間だけが過ぎていきました。そんな情けない私自身を変えてくれたのはアメリカでした。

私の学校は当時アメリカのテキサス州のU・M・H・Bという大学と姉妹校の提携をしており、三か月間という留学制度がありました。私はアメリカへ留学したいという一心で両親を説得し留学させてもらいました。

一九九八年私を含め私の学校から三人、宮崎県のえびの国際専門学校から四人、合計七人で期待と不安を胸に渡米しました。

アメリカに到着し二日目には、私たちの英語の実力を知るためのマークシートでのテストがありました。私は日本で英語の勉強をまったくと言ってもいいほどしていな

かったため、案の定最悪の結果でした。おそらく七人中最下位だったと思います。

それからの私は悔しさと歯がゆさで勉強に励みました。授業が終わると図書館でその日の復習、次の日の予習をし、夜は体育館で外国人と一緒にバスケットボールやバレーボールで汗を流しながら、授業で勉強したことについて話しかけたりしてコミュニケーションを図りました。そして家に帰った後机に向かい、再び勉強に励みました。

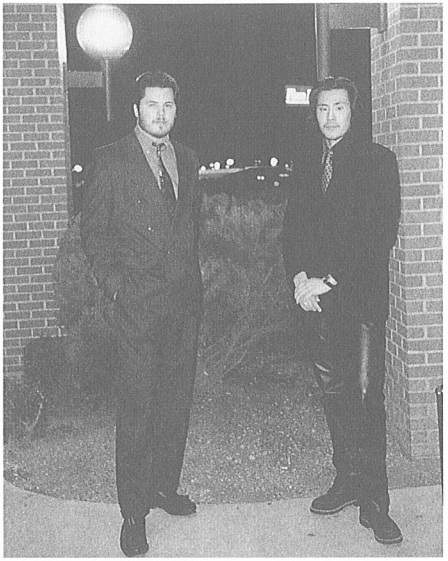
このように充実した生活を送っていく中でも、やはりホームシックにはかかりました。しかしそんなホームシックなど吹き飛ばすような「ブレット」という素晴らしい友人との出会いがありました。

ブレッドは見た目は恐ろしくてプロレスラーのような体格をしていましたが、日本人や日本語に興味を持っていて、明るく、気さくな人間でした。私は彼に日本語を教え、彼は私に英語を教えてくれました。また言葉だけでなく、日本とアメリカとの文化や生活様式などの違いなども学びました。

アメリカでの生活もより一層充実し、まったく話せなかった英語も着実に進歩していきましたが、なかなか私とクラスメートとの差は縮まりませんでした。そんな私は最大のライバルはクラスメートではなく、自分自身だと思うことにしていました。それは私には高校時代、野球でのライバルが数人いました。私は彼らが活躍するのを素直に喜べず、知らぬ間に喜ぶどころか劣等感やねたみを持っていたからです。私はそのような気持ちをも持っていた当時の自分自身が大嫌いでした。

話が横にそれますが、私の経験上、自分自身を愛せる人間は家族や友だちや他人をも愛せると思います。また自分自身を愛せない人間は、家族や友だちや他人は愛せないと思います。それと一緒で、自分自身に勝てない人間は、友だちや社会の人間にも勝てないと思います。

正直言いますと、私は留学について両親に罪悪感を感じていました。なぜなら、学校の授業料のほかにさらに三か月間の留学費用を九十万円も払ってもらったからです。一日一万円もかかる留学ですから、私は最低でも一日一万円、もしくはそれ以上の勉強と体験をしなければならないと自分に言い聞かせ、何事にも積極的に一生懸命取り組みました。結果的に私自身のライバルであった三か月間という日数に打ち勝つことができ、お金では決して買えない人生勉強ができたと確信しています。



ブレッドとちょっと気取って

いよいよ留学のプログラムを終了し、日本へ帰国することになりました。見送りには大勢の友だちが私たちを見送ってくれ、涙でみんなと別れました。その涙の意味は、

アメリカへの感謝の気持ちの涙でした。

私は今でも、私の人間性がアメリカで変わったのではなく、アメリカという国が私の人間性を変えてくれたと思っています。それぐらいアメリカという国は私に「前向きに生きる喜びや生きる幸せ」を教えてくれました。

カナダ　―ジャスパーとバンクーバーでの生活―

私には留学したい気持ちがありました。でも留学費用の負担が両親にのしかかるのは十分過ぎるほど分かっていたので、海外で働きながら英語を学ぶというワーキングホリデーというシステムを活用することにしました。カナダで生活するためにアルバイトでコツコツお金を貯め、鹿児島国際観光短期大学校を卒業すると同時に、アメリカで出会ったヒロという友人と一九九八年四月に「不安や心配はまったくなく期待だけを胸に」旅立ちました。私たちに不安や心配がまったくなかったのは、カナダに滞在する前に海外関係に詳しい日本の会社にホームステイ先と仕事を世話してもらっていたからです。

最初に滞在することになっていたのは、カナダの西海岸に位置するバンクーバーでした。バンクーバーについて簡単にご紹介します。

バンクーバーは人口約一八〇万人で、町の大きさは福岡県ぐらいの規模です。町の

中心部には近代的な高層ビルが建ち並んでいますが、チャイナタウンなどの古い街並みもあり、また一歩町を出ると山や海などの自然があり、非常にバランスのとれた美しい町です。

私たちのバンクーバーでの予定は三週間のホームステイと語学学校での英語研修で、そこを終えた後ジャスパーという田舎町のリゾートホテルで仕事をすることになっていました。

バンクーバーでのホストファミリーはフィリピン人で、色々と親切にしてもらい楽しい生活ができました。三週間後、私たちは予定通りジャスパーへ移りました。

ジャスパーは人口五〇〇〇人程の小さな町で、町自体に見るものはほとんどありませんが、カナディアンロッキーの第二の拠点地でもあり、標高三〇〇〇メートル級の山並みが目の前にあり、特にマウント・エディス・キャベルという山は夏でも雪が山頂に残っており芸術的にも見事で、また数え切れないほどの美しい湖があります。夏はカヌー、ラフティング（川下り）、マス釣りなどで、世界中の自然を愛する人々がジャスパー国立公園を訪れるのでも有名です。そのような素晴らしい自然環境の中で生活がスタートしましたが、私たちはすぐホームシックにかかってしまいました。

理由は仕事上での会話が全部英語でのやり取りであり、留学なら先生に同じことを何度も聞けるのですが、仕事となると何度も上司に同じことを聞いていますと仕事がいつまでたってもはかどりません。そんな私でしたのでだんだんその上司の態度が冷

たくなり無視されたのです。

私とヒロとは業務が違い、私はシーツやタオルなど洗濯しアイロンを掛けるリネン関係の仕事でした。私たちは留学とは違い、海外で働いて生きていく難しさをそこで初めて知りました。しかし気持ちを前向きに持ち、お互い励まし合いながら積極的に与えられている仕事に取り組んでいきました。日が経つにつれて、私たちも仕事を着実にこなし、英語も少しずつでしたが上達していき、同僚たちももうただのお荷物ではなく私たちの存在を認め始めました。

一か月が過ぎると生活のリズムができて、休日などはレンタカーを借りて山や湖などにドライブに行ったりして楽しく過ごしました。でも私たちはジャスパーという町の小ささに何か物足りなさを感じていたのと、正直言って仕事が好きではありませんでした。そこで仕事を辞める決意をし、ホテルのマネージャーと仕事を世話して頂いた海外関係の日本の会社へ丁重に辞める理由を説明しました。そしてバンクーバーへ再び戻ることになりました。

私たちは電話で、以前ホームステイをさせていただいた家族に「食事も何もいらないから、仕事を見つけて落ち着くまで泊まらせてもらえないか」と事情を説明しました。快く家賃もわずかな金額で宿泊させてもらい大変ありがたいことでした。私とヒロの持ち金はたったの五〇〇ドル（日本円で三万五千円）ぐらいしかなかったのです。

翌日から仕事を探し始めましたが、何度電話をかけても断られ、何度面接を受けて

も落とされ、お金と貴重な時間だけがなくなっていきました。二人ともジャスパーでの仕事を辞めたことを後悔し、ストレスがたまり、いら立ち、度々衝突しました。ですが私たちは自分たちで決めた道だから、たとえどんな困難が待ち受けていても日本にいる両親や友だちだけにはいっさい何も頼らず、カナダでの一年間の生活を成し遂げようとかたくなな信念を持っていました。そしてまたこれは神様が与えてくれた試練だと思い、その試練を乗り越えたら必ず素晴らしいことが待っているのだと信じていました。

私たちの思いが実り、お互い別々の仕事が決まり喜んだのですが、実はもうお金は底をつき、二人合わせてわずか十ドル（日本円で数百円）ほどしかなく、家賃も払えず、仕事での給料が入ってから家賃を払う形をホストファミリーにお願いしてもらい、仕事だけに集中しました。

私は日本食レストランで週六日、朝から夜まで働くことになりました。業務は皿洗いでした。

単純に皿洗いと思われるかもしれませんが、皿洗い以外に米を洗ったり、すし飯を作ったりなど、挙げれば切りがないほど仕事がありました。はっきり言って「使いパシリ」でありました。しかし当時の私にとってはプライドなど、そんなことはどうでもよく、仕事を持ち働けるだけも幸せでした。なぜなら私は仕事が決まるまで、多くの会社に電話で断られ面接で落とされたからです。またジャスパーでの仕事を辞めた

ことを後悔したことを思おうと、辞めたくても辞められませんでした。それともう一つは異国の地で負け犬で終わるのではなく、自分自身に勝ち、生き抜くためでもありました。

生活と仕事のリズムが少しずつできていきました。そんな私ですが一年間のカナダ滞在で危険な目、大げさに言えば命を落としかねない出来事に三度遭遇しました。

その一つは、私が仕事場での夕食を食べそこねて、仕事の後、夜十一時ごろ一人でマクドナルドへ行ったときのことでした。店内は広いにもかかわらず、私と従業員二人しか居らず、従業員は閉店のための後片づけをしていました。私がビッグマックセットを食べていたとき、私の目の前にカナダ人の男性が座ってきました。彼は私に出身国や仕事場など質問し、私も普通に受け答えしていました。ところが突然、彼の目つきが鋭くなり、私に「ドゥ・ユウ・ハブ・サム・ブレッド?」と聞くのです。私はブレッドという言葉の意味を日本語に直訳するとパンと習ってきたので、私は彼にハンバーガーを差し出しました。そうすると彼がスラング英語でのブレッドの意味はお金ということを教え、彼は私に強い口調で「金を出せ」と言ってきました。しかし「ただでさえお金がないのに、どうしてやらなければいけないのか」と思い必死で抵抗しました。彼が「後ろを向け」と私に指示を出し、後ろを見ると、そこにはプエルトリコカン系の体格のいい男が座っていました。そして驚くことに私の右脇腹に果物ナイフを突き立ててきたのです。私は鳥肌が立ち、七〇ドル持っていた中の一〇ドルを

仕方なく渡しました。それを奪った彼らは素早くその場から立ち去りました。この出来事を冷静に考えてみると、殺される心配はなかったかもしれませんが、ナイフやピストルを向けられたとき人間は冷静さを失い、頭が混乱してしまうのが普通だと思いました。その事件後、生活と仕事により一層気合いを入れて励みました。

仕事も生活も順調に進み、遅れていた家賃もホストファミリーに払いました。お金も貯まったのでアパートを借りて二人暮らしを始め、気持ちにも余裕が持てるようになりました。しかし私たちはあえて仕事を辞める決断を下しました。その理由はカナダで生活しすでに半年が過ぎているにもかかわらず、私たちの目的の一つである外国人とのコミュニケーションがまったくと言ってもいいほどなく、英語が向上していなかったからです。それと私の考え方から言うと、外国で生活しているときは外国人とコミュニケーションを図り、極力日本人とのコミュニケーションは避けるということです。なぜなら日本人とは帰国してから毎日でもコミュニケーションを図ることができるからです。私たちは生活費も次の仕事が決まるまでのために、今度は三〇〇〇ドル（日本円で二十五万円）貯めてから、三か月で仕事を辞めました。

そしてすぐにヒロと仕事を探し始めバンクーバー市内のあらゆるホテルなどを含めた外資系の会社約二十か所足を運びましたが、ことごとく断られました。それで私たちはバンクーバーに見切りをつけ、新天地を探すことにしました。新聞や情報誌などに目を配り、そこで目にとまったのが「二〇〇一年世界陸上」の開催地でもあったエ

ドモントンにある約十か国の人種が働いているレストランでした。私たちはそのレストランに電話で問い合わせ、英文の履歴書を送り結果を待ちました。その結果、私たちは採用になり、十二月中旬にバンクーバーからエドモントンへと移りました。

エドモントン

エドモントンには約六二万人が住んでおり、冬期のカルガリーオリンピックが開催されたカルガリーと並び著しい発展を遂げた町です。オイルや天然ガスなどの資源を産出したことも大きな理由でしょう。

そして、世界最大のショッピングセンターであるウエスト・エドモントン・モールがあります。その館内には八百軒以上のお店や映画館、ホテル、さらに遊園地、プール、アイススケートリンクなどのレジャー施設も備えていて、とても一日では回りきれない程の大きさです。幅広い年齢層の方々に愛されているモールなのです。

私たちがエドモントンに到着したときは雪が降っており、気温はマイナス十℃ぐらいで凍えるほど寒かったです。でもその寒さはまだ序の口でした。私は南国鹿児島育ちで寒さや雪にはこれまで縁がなかったのですが、この寒さでの生活は一生に一度の体験だと思い、貴重な日々を送ろうと思いました。

寒さの生活の中で一週間が経過し、仕事場の方の紹介でアパートも無事に決まり、

仕事も与えられたことを黙々とこなして行きました。私たちの仕事は皿洗いと雑用でした。職場は料理場の料理長であるベトナム人を中心に中国人、インド人で構成されていました。その中でも特にベトナム人が私たちに対して「あれ持って来い。これ持って来い」と命令形で指示したり、また私たちが料理の作り方を聞いても教えてくれず、ベトナム語でからかったり馬鹿にしたりしました。私たちは日本人としての誇りがありましたので、できることは「ＹＥＳ」できないことは「ＮＯ」とはっきり彼らに意志を伝えました。そうすることにより彼らも少しずつ私たちを認め、料理の作り方や皿洗いも交代制になり、からかわれず馬鹿にされず対等な立場を築くことができました。

そこで私は外国人と交流している中で、感じたことがありました。外国人は自己主張できる人間が多く、「ＹＥＳ」「ＮＯ」がはっきりしており、自分自身に誇りと自信を持っています。でも日本人はどちらかと言うとその中間である「たぶん」や「おそらく」という優柔不断な言葉が多いようです。だから日本人のそのような点を外国人は自己主張がないと指摘するのではないかと、そう感じました。

私は外国人に対して受け答えするとき極力「たぶん」や「おそらく」という英語は使わず、「ＹＥＳ」「ＮＯ」で答えて、言うべきことははっきりと主張するように努めています。読者の方々でも、海外旅行やあるいはこれから留学やワーキングホリデーを考えている方がいましたら、私みたいな人間からのアドバイスとして、外国人に対

して受け答えするときは、日本人である自信と誇りを持ち「YES」「NO」でぜひ答えてみてください。なぜなら私が出会ってきた数々の外国人はそういう人間を好み、求めていましたから…。

話がだいぶ横にそれましたが、私たちもエドモントンでの寒さでの生活にも慣れて、充実していた矢先に大きなトラブルが起こったのです。前にも述べたようにカナダでの生活の中で三度危険な目に遭遇し、その中の一つはすでに記したようにマクドナルドでの出来事でした。ここで残りの二つの出来事を紹介したいと思います。

二つ目は、私の友人ヒロだけが仕事という日に、彼がベトナム人の男性と仕事中口論になり、殴り合いのケンカになる寸前だったことを私はヒロから聞きました。翌日、私たちはあまり気にせず二人で出勤し、普通に仕事終えて、二人でコンサートに行く予定でしたので足早に職場を出て路地裏を歩いていました。突然、ベトナムの二人の男が後ろから走って来て「待て」と私たちを呼び止めました。ヒロと口論になった男がヒロに「お前ケンカがしたいだろう、ケンカしてやるよ」と叫びました。そこで私が「お前らガキじゃあるまいし、ケンカをしてしまえばお前らも俺らもカナダから追放されるぜ」といさめようとしたとたん、もう一人のベトナム人が鉄パイプで私に襲いかかったのです。長髪だった私の髪をかすり、そのまま鉄パイプが壁にぶち当たりました。そこにタイミングよく警察がパトカーで駆けつけ、私たちにピストルを突き立て「動くな。動くと撃つぞ」と言い、私たちを壁にはいつくばらせました。私たち

は手錠をかけられて洋服を細かく調べられた後に、パトカーの中でそれぞれ事情聴取を受けました。私たちが警察に説明すると警察は一連の流れを把握したようで私たちを家まで送ってくれました。結局私たちは楽しみにしていたコンサートには行けませんでした。

「もし」という言葉を使うとするならば、鉄パイプが私の髪ではなく目でしたら失明していたでしょうし、もし警察が駆けつけてくれなかったらどういうことになったのか、考えると鳥肌が立つというより恐ろしくなります。

三つ目の出来事は、私たちと同じ職場の女性と韓国人女性三人の計六人でカラオケに行ったときのことです。

カラオケを歌い終わり、先に韓国人女性三人をタクシーで帰らせ、私たち三人も次のタクシーをロビーで待っていたとき、中国人の若者のグループが妙に私たちをにらんでいました。私たちは無視していたところ、彼らのグループは外へ出て行ったので「落ち着いた」と思っていたところ、今度は中国人の従業員が私たちに「お前ら早く帰れ」と言ってきました。私たちが「なぜだ？」と聞くと従業員は「あいつらはお前らに必ず因縁をふっかけに戻って来るぞ」と言います。私たちが「話し合うから連れて来いよ」と言うと「それはヤバイ、ヤバイから」と言い、強引にカラオケルームへ連れて行きました。私たちは何がやばいのか分からず従業員を疑い始めました。カラオケルームで約三十分間が経過し、その間従業員が何度か来るたびに「早く出してくれ、

帰りたいから」と言いました。従業員はその度ただ一言「もう少し待ってくれ」と言いその場から去ります。やがて一時間が経過したところで従業員が「今だ、今帰れ」と言いました。私たちもその大声につられて走って行ってタクシーに乗りました。おかげで、因縁をつけようとした中国人たちは私たちを捕まえることはできませんでした。

それから数日後、私は知り合いにフィリピン人の男性が中国人の若者グループに殺されたということを聞きました。それが私たちに因縁を吹っかけてこようとした中国人の若者グループかどうかは確かではありませんが、よく考えてみますと中国人従業員が私たちを助けようと投げ掛けた言葉の意味がよく理解できました。

私自身がカナダや後々生活するオーストラリアで感じたことや聞いたことなのですが、中国人やベトナム人に限らず、東南アジアの人たちは国自体が発展途上で、貧しい生活をしている人が多いようです。だからハングリー精神が人一倍強くて、勤勉です。彼らには私自身、仕事でからかわれたり、馬鹿にされたりしましたが、仕事に取り組む姿勢は見習うべき点がたくさんありました。きっと彼らの中には亡命して来たため母国に帰りたくても帰れず、外国に夢と自由と未来を持ちながら一生懸命生活している人がいたり、またそれとは対照的に外国でひたすら英語の勉強に励み、両親、兄弟、あるいは愛する人のために将来は母国へ帰り、少しでも収入の高い仕事に就き家族を養っていきたいと思っている人がいるからでしょう。

私はカナダでの生活で多くのことを体験して、素晴らしい経験ができて勉強になりました。その中で私が一番勉強になったことは「命の大事さ」についてでした。

それは人間は命があるからこそ過去を振り返ることができ、また現在を過ごし、そして未来を迎えることができるからです。

私はカナダに一年と一か月くらい住みました。もう少し住みたかったのですが父の仕事の都合上、日本へ帰国せざるを得なくなりカナダに別れを告げ、友人のヒロと一緒に日本へ帰国し私は南国の鹿児島へ、彼は北国北海道へと共に別々の道を歩んで行きました。

モデルと選挙運動

私は一九九九年五月にカナダから帰国しました。父の仕事の手伝いが本格的に始まるのは翌年の一月からだったので、私は市内のホテルでウェイターとして働き、仕事が終わってから英会話スクールに通っていました。それともう一つ、私が一度経験したかったCM、雑誌、ポスターなどのモデルの仕事もしていました。私が所属していたモデル事務所は当時、東京、福岡、鹿児島の三都市に事務所を持っていました。この事務所で驚いたのはのスタッフの約九割が女性だったことでした。私はその女性スタッフの方々にモデルとしての歩き方、話し方、表情の作り方など学びました。一昔

前にキャリアウーマンという言葉がはやりましたが、その言葉がまさに当てはまるのが、私を指導してくださった方々だと思いました。

二十一世紀を迎え、日本、ひいては鹿児島も男性、女性が本当の意味での平等となってゆくと考えます。仕事や夫婦の間でも、男性にできないことは女性を信頼し、協力してもらい、または女性にできないことは男性を信頼して協力していくことにより、そこに男性、女性の間に素晴らしい絆が生まれて行くでしょう。

年が明け、私はホテルでの仕事を辞め、英会話スクールも休学しモデルの仕事だけを続けながら、鹿児島市議会議員である父の選挙の手伝いをしました。なぜ、私が父の手伝いをしたかと言いますと、父が二十歳までの学費や留学費などのあらゆる面で養ってくれたことや母が四年に一度の父の選挙を迎えるごとに体力が衰えて、思うように家事や父の後援会活動の手伝いをこなしていくことが難しくなったなと思ったからです。少しでも母に協力して私をこれまでに育ててくれた両親へ、小さな恩返しをしたかったのです。私は友だち十数人に協力してもらい、父の後援会、青年部、『D・L・F』を発足させました。『D・L・F』の意味は英語で、Dream（夢）、Liberty（自由）、Future（未来）の頭文字を取ったもので、私と友だち全員で決めたものでした。なぜそういう名前を決めたかと言いますと、鹿児島で暮らしている人たちが夢や自由や未来を持って、安心して働ける職場や安心して生活できる町をつくりたいという願いや思いを込めたからでした。そして、私たち『D・L・F』は私の父と「二十一世

紀を語る若者の会」を開き、百人以上の若い人たちを集めました。実際に父を知らない方々や知っていても話したことのない人たちが父のために集まってくださったことには、正直言って驚かされました。私は集まってくださった一人ひとりの方々やそして何よりもその方々を一生懸命集めてくれた友だちの全員に、今でも感謝しています。あらためて友だちは財産であり、宝物でもあると痛感しました。

父も支持者の方々の一票一票の積み重ねで無事当選することができて、私自身も貴重な体験ができました。

父の手伝いを通じて勉強できたことや感じたことは、お金でも「一円を笑う人間は一円に泣く」というように、一票を笑う政治家は一票に泣くという有権者の方々の一票の大事さや有権者の方々の気持ちを動かす難しさなどでした。

そしてまた、感じたことは市民、県民があってこその議員であるということでした。なぜなら議員はあくまでも有権者の代弁者にすぎなく、選挙で落選してしまえば代弁者としての政治ができないからです。

だからと言って当選した議員が偉いかと言うと、私自身はそうでもないと思いました。それは、私たちも議員も同じ人間であるということに変わりがないからです。

私は二十一世紀の鹿児島は、今まで年配の方々がつくり上げてきた素晴らしい部分は継承し、そうでない部分は勇気を持って変えてゆき、今から社会へ貢献して行かなければならないと考えています。私と同世代の若い人たちが中心となり、これまで社

会へと貢献されてきたお年寄りの方々、現在、社会に貢献なさっている中高年の方々、そして二十一世紀の宝物である子供たち、または今から生まれて来る目に見えない子供たちも含めて、年齢に関係なくみんなが活気と力強さに溢れ、安心して暮らすことのできる誇り高い鹿児島を、日本だけではなく世界も視野に入れてつくり上げて行くべきだと思っています。

シドニー

私はアルバイトでお金を貯めて二〇〇〇年八月にオーストラリアのシドニーへ一人で旅立ちました。

オーストラリアを選んだ理由は二〇〇〇年九月に開催されたシドニーオリンピックでのボランティアを通じて、世界中の人々と交流を図ることと鹿児島市の姉妹都市であるパース市での身体に障害のある方々へのボランティアを体験したかったからです。

シドニーに到着しバック・パッカーズという旅人が利用する決してきれいとは言えない四人部屋に泊まりながら、住む家とオリンピックのボランティアを探しました。

私は最初に家よりもボランティアを探しましたが、すでに早くから決まっていて、やむを得ずあきらめて働き口を探し始めました。

仕事は外資系を探したためなかなか決まりませんでした。そんなとき同じバック・

パッカーズで友だちになった日本語が堪能なイスラエル人の「シオミ」という男性が私に「オリンピックのピンバッジの仕事を一緒にやらないか？」と誘って来ました。私は少し疑いながら話を聞くことにしました。

彼の話を聞くと、彼が以前長野県に住んでいた頃に冬の長野オリンピックが開催され、そのときに世界中からオリンピックのピンバッジを集めたり、売ったりする外国人が多かったとか。そこで彼自身も世界中の人たちと一緒になってピンバッジを集めたり売ったりして、みんなと楽しく交流を図ることができたと言います。それでシドニーオリンピックでも、ピンバッジを集めたり売ったりするために訪れたんだと聞き、私は彼と出会って間も無いこともありましたが、また新しい未知の世界へ入る好奇心から彼と仕事をすることを決心しました。

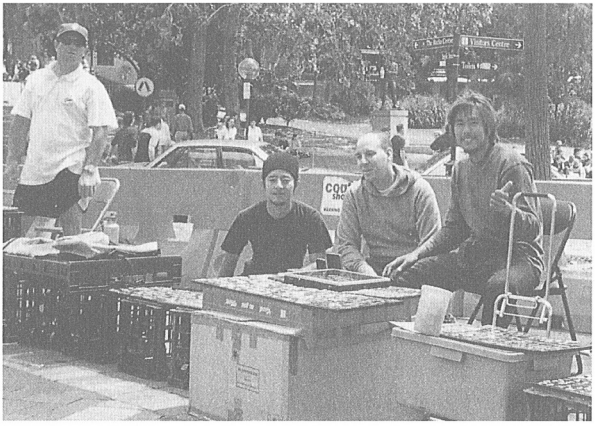
私と彼との契約は、すべてが彼のピンバッジということもあり、売り上げの八〇％は彼の収入で、残りの二〇％が私の取り分でした。売れれば収入がありますが、売れなければまったくの無収入という歩合制での契約でした。私と彼とはお互い別々の場所で売りました。私はシドニーの観光地で有名なサーチュラーキーやダーリングハーバー、そしてオリンピック競技場の外の周辺で、日本でいうお祭りなどの出店みたいな感じで集めたり、売ったりしました。

私たちが扱っていたピンバッジは、各国の国旗や世界のテレビ局などのお店にはほとんど置いていないピンバッジばかりで、お客さんのほとんどが外国人でした。外国

人のお客さんは私が設定した値段で買うことはほとんどなくて、値段を叩いてくるので私も考えて十ドルで売りたいピンバッジには値段を二十ドルぐらいに設定して、お客さんが値切ってきても十ドルまでは値を下げることができるようにしました。そうすることで私もお客さんもおおよそ自分の思い通りの値段で売ることや買うことができて、お互いにとって満足できました。

私は世界中の人々と楽しく交流を図ることができて素晴らしい体験になりましたが、ピンバッジを集めたり、売ったりしている中で残念なことがありました。それは世界中の多くの人は母国の国旗のピンバッジを探し買いましたが、日本人の場合は日の丸を探して買う人はご年配の方がほんの少しだったからです。若い人たちで買う人はおらず、それよりも他国の国旗のピンバッジを買います。そんな若い人たちには日本に対する誇りが欠けているようで非常に残念でした。

私はピンバッジの仕事を三か月で辞めてレストランでウェイターとして働き始めました。



ピンバッジを売る（シドニーにて）

仕事は順調でしたが、私が住んでいたキングス・クロスという町は治安が悪かったため家を移ることにしました。でもそれが結果的に大きなトラブルになってしまいました。私はオリンピック期間中に知り合いになり、親しくなった日本人男性と日本人向けの情報センターに行き、マンションの物件を探しました。私たちはイラン人男性と共同生活する物件を選び、部屋の主であるイラン人に二人で保証金二〇〇〇ドル（日本円で約二十万円）を支払い、契約しました。

彼のマンションに住み一週間が経過した途端に彼の様子が急変し、私たちにパスポートのコピーを要求してきたのです。私たちは契約時にパスポートのことは話し合っていませんでしたし、またパスポートは命の次ぎに大事なもので、たとえコピーでも悪用されると困るのできっぱりと断りました。すると彼は私たちに「コピーを持って来ないのなら出て行け」と大声で怒鳴りました。そして私たちも「保証金を返せば出て行くよ」と言い返しました。彼も私たちが出ていかないのに対していら立ち、一人では何もできなかったので友だち三人を呼び、無理やり私たちを追い出しました。結局私たちはその日は公園で野宿し、翌日ホテルへ移りそして警察署へ行きました。

警察に一連の流れを説明したところ、何と驚くことに彼は私たち以外に十数人の日本人をだましていることが分かりました。私たちは被害者に連絡を取り、全員で被害届を出して「捕まえて欲しい」と警察に訴えましたが、その問題が民事問題であったため無情にも警察は動くことができませんでした。そこで私は「この問題は私個人の

問題ではない。このまま引き下がってしまえば、あいつはまた日本人を馬鹿にして同じように詐欺を繰り返す」と思ったので、私と一緒に家を探した男性とで日本の誇りと名誉にかけて、言葉は汚いですが彼をぶっ潰すことに決めました。

マンションの前で詐欺師を待ち伏せしていたところ、私たちが追い出されたときエレベーターの中で一緒になった男性に会い、協力してもらうことになりました。皮肉にもその男性の出身国は詐欺師と同じイランでした。そのイラン人が、自分の部屋に私たちがいないという設定で詐欺師を呼んでくれたので、私たちは詐欺師を押さえることができました。話し合うと、詐欺師は無職で、ギャンブルで私たちの保証金を使っていてもうお金を返す能力がありませんでした。そこで私たちは彼のパソコン数台、ビデオデッキ数台、ビデオカメラなどの電化製品を押さえて、それらを売って返って来なかった保証金に充てることで納得しました。

最終的に警察に聞いたところによると、その詐欺師は私たちの問題以外に車を盗み、盗んだ車で人身事故を起こしてひき逃げをしていました。結局、窃盗罪とひき逃げで逮捕状が出てしまい、自分自身で潰れてしまいました。私はそのトラブルの件で勉強した事は「人間とお金」についてでした。人間というのは先入観だけで判断するのではなく、よく観察してからでなければ信用してはいけないこと、またお金に対して強い執着心があり、お金をいつも追っている人間はその詐欺師みたいにお金が逃げて行き、お金に執着する心が薄い人間はお金は後からおのずとついて来るのではないかと

思うことでした。

私はトラブルに巻き込まれたので、予定よりかなり遅れて二〇〇一年五月にシドニーからパースへと旅立ちました。

パース

西オーストラリアの州都であるパース市には約一二〇万人が住んでいます。世界で二番目に美しい町と位置づけられており、「世界中で最も清潔な町」「世界中で最も孤立した町」などと、これまで訪れた人々から様々な形容詞がつけられています。

パース市が鹿児島市と姉妹都市盟約を結んだのは一九七四年四月二十三日で、国際交流を深めるための鹿児島公園という立派な公園もあります。私はシドニーから鉄道とバスでオーストラリア第二の都市であるメルボルンと英国風の街並みで有名なアデレードに、それぞれ二、三泊ほど立ち寄り観光してからパースへと向かいました。

私はパースには約二か月しか住むことは決めていませんでした。期間も短いということで家よりも先に、身体障害者のボランティアを新聞などの情報紙で調べました。

調べた結果、日本人が設立したボランティア団体や西オーストラリア州ボランティア協会などがあり、足を運びました。でも私の滞在期間の短さや身体障害者に対するボランティア経験がないことから、ボランティアをすることはできませんでした。私

は半分以上あきらめながら、日本人向けの情報センターに行きました。

するとボランティア募集の記事が壁に貼ってあり、私はすぐにボランティアを探しているところを従業員に尋ねて面接を受けることができました。私を面接してくれた方は日本人情報センターの代表である、オーストラリア人の女性で、私が一か月間という短期間しかボランティアができないのにもかかわらず雇ってくれました。私の主な業務は日本人への安全な家の紹介やオーストラリア人の家族と農業で働きながら生活するファームステイの紹介などのボランティアでした。

結局私は身体障害者に対するボランティアはできずに一〇〇％満足することはできませんでしたが、違った形でボランティアができたのでそれなりに私自身よい体験ができたと思い、予定通りパースに約二か月間滞在し、一か月間でボランティアを辞めて日本に帰国するために、パースから列車で再びシドニーへ戻りました。列車の旅は三泊四日の六十七時間の長旅でした。私はお金を節約するために寝台ではなく、少しでも安い普通座席をとりました。しかしさすがに六十七時間ともなると腰やお尻に激痛が走り、眠たくても眠れず、快適なはずの列車の旅が快適ではないままにシドニーへと到着しました。

私は約一年間オーストラリアに滞在し、二〇〇一年七月にシドニーから、これまでの海外生活で勉強し経験できたことを必ず活かして夢を実現するために鹿児島へ帰郷しました。

ＥＮＤ

あとがき

高校時代に野球で挫折して、その後海外で生活をし、それぞれの国で何を学び、勉強したかとそのテーマを挙げるならば、アメリカでは「生きる喜び・幸せ」、カナダでは「命の大事さ」、オーストラリアでは「お金と人間」ということです。それぞれの国で苦しい思いをし痛い目に遭ったりしましたが、大勢の素晴らしい人間に出会い、助けられてきたからこそ数々の困難を乗り越えられたのだと思います。

私は、今日まで出会ってきた人を大事にし、明日から出会って行く人たちをも愛していきたいと思っています。

この冊子を読まれた方の中には私に会ったことのない方もおられると思いますが、この冊子を通じて間接的に出会っているのではないかと私自身の勝手な解釈ですが、そう思っています。

読者の方々に少しでも私自身を知っていただけたかどうかは分かりませんが、最後まで私のような人間の作った冊子を読んでくださった一人ひとりの方へ心から感謝いたします。本当にありがとうございました。

著者略歴

1977年鹿児島市生まれ
鹿児島国際観光短期大学校卒業
鹿児島国際観光短期大学校在学中、姉妹大学アメリカ・テキサス州メリーハーディンベイラー大学に短期留学。
卒業後働きながら英語を学ぶワーキングホリデーで、カナダ、オーストラリアに滞在する。
2001年11月に日本人と外国人との交流を目的とする国際交流の会を発足、現在に至る。

彷徨い —自分探しの旅に出かけて—

平成13年12月20日印刷

長 田 康 秀
鹿児島市上福元町3930
電話099-267-7473 Fax099-266-0321
携帯090-5289-4415

印刷　南日本新聞開発センター
〒892-0816 鹿児島市山下町9-23
電話099-225-6851 Fax099-216-9099